

# 連作のつくり方

——小島なお歌集『サリンジャーは死んでしまった』を読む

近代の短歌が、古典和歌と大きく違っているのは「連作」という方法を導入したところにあるとわたしは思っています。むろん口語的表現（現代の話しことばに近いことばを使うこと）も大きいのですが、そのほかに、数首の歌を、同じ題材とか同じテーマでまとめるといふ「連作」の方法は、一首の歌だけで表現するのは、また別の場面を作り出しました。たとえば、みなさんが、「友の会」に提出される歌も、五首でありますから、おのずから、同じ旅の情景を次々に歌ったりすることになり、気付かないうちに「連作」になっています。

もちろん五首では言い足りない場合も多く、七首、十首と「連作」をつらねることもありましょう。

最近出た小島なおさんの歌集『サリンジャーは死んでしまった』（角川書店）という歌集に、五首連作の例がありますので、読んでみましょう。



ある夢で指揮者となりて号泣すああ交響曲シムフォニーとは激たぎちくるもの

ある夢で学者となりて狼狽すああ公式とは偉大なるもの

ある夢に船乗りとなりて往生すああ海峡とは永遠の門

ある夢に絵描きとなりて瞑想す水彩画とは静かなる嘘

ある夢に医学者となりて逃亡すああ人体とは広大な窓

小島さんは一九八六年生まれで青山学院高等部在学中に角川短歌賞を受賞されました。この歌集は第二歌集です。若い歌人らしく、この「ある夢」五首連作は、大胆な構成をとり、ずばずばと歌っています。それでいて内容は難解なところを謎のようにもって歌う口マン性を帯びています。

「ある夢で（に）」という初句の共通性。そして第二句で「指揮者」など夢の中で自分が成りかわった人物を明らかにし、第三句の「号泣す」「狼狽す」「往生す（これは困ったの意）」「瞑想す」「逃亡す」などの二音漢字含みの動詞句。そして（四首目には、わざと書かれ

ていませんが)「ああ」という嘆声。そして名詞句で終る「……とは……○○」という下の句。すべてある意図をもって五首が構成されていきます。

読んでいて、多少、内容と形式(いま挙げたような初句から結句までの文体の五首における統一)とのあいだに、きしみがあるようにも思えました。しかし、それは叙述の形式をきめてしまつて五首並べるといふ放れ業にはつきものだともいえます。

また、そのために、たとえば三首目の「海峡とは永遠の門」のような、いくつもの解釈を生みそうなことばが出て来ます。船乗りが「海峡」をのりこえるのに「ここは永遠に船乗りをくるしめる関門だ」と思つたのでしょうか。「永遠」へいたる「門」だと信じたところなのでしょう。そういう多義性(いくつも解釈のわかれること)を承知の上で作つているところに、ある種のトライアル(試行)のローマン性をわたしは感じたのです。その点は「水彩画とは静かなる嘘」にも「人体とは広大な窓」にも感じます。この作者はこの連作で読者を挑発しているともいえるのでしょう。

もう一つも小島歌集から「連作」を引用してみます。「夕暮れ」という作品です。

今日の昼昨日の夜に食べたもの思い出せない祖父の夕暮れ

祖父のいる病室にバナナ、柿、蜜柑届け終りて祖母の夕暮れ

卒論の資料ばらばら落としたる付箋だらけのわたしの夕暮れ

妹の名前でたまにわれを呼ぶ単身赴任の父の夕暮れ

父からのメールの口調が不器用で変だと笑う母の夕暮れ

この連作も「夕暮れ」という結句を揃えています。一首が名詞句仕立てになつているのも五首に共通しています。

老齡の祖父の「夕暮れ」そして、卒論準備中の自分の「夕暮れ」。単身赴任先からの電話でしょうか、単身赴任先から週末にかえつて来た父なのでしょうか。どの一首にも、若い作者を包んで存在する高齡化社会の家族ひとりひとりを象徴するような事例がえらばれて、歌われています。「ある夢」の五首とは違って、写実風の書き方ですが、いろいろ工夫はしてあります。

たとえば、祖母を歌つた二首目の、果物の種類のあげ方、並べ方。そして「届け終りて」という言い方。作者はこの時、祖母のそばにいたのでしょうか。それとも祖母が「届けて来たよ」と報告したのでしょうか。三首目も「付箋だらけ」なのは「卒論の資料」であると同時に、「わたしの夕暮れ」そのものでもあるという暗喩めメタファーいた言い方もおもしろいのです。

小島なおさんの五首の連作を紹介しました。

作り方に作為があつてもいいし、もつと自然な流れで五首なり七首なりまとめでもいいでしょう。連作には、それなりの効果があり、うまくいくとある種満足感もえられます。